

審 査 結 果 の 要 旨

論文題目「経口的切除を行った下咽頭表在癌のリンパ節転移予測因子に関する研究」

学位申請者 戎本 浩史

本論文は、近年の光学機器の進歩に伴って増加している下咽頭表在癌症例について、経口的切除標本30例31病変の解析からリンパ節転移の予測因子について後方視的に検討した論文である。欧米では、集積できないような早期症例が対象である。病理学的な腫瘍深達度、腫瘍の厚さ、脈管侵襲、浸潤様式について臨床病理学的因子、特にリンパ節転移との関連をレトロスペクティブに比較解析した。その結果、腫瘍深達度と腫瘍浸潤様式が脈管侵襲、頸部リンパ節転移の予測因子と考えられた。

本論文に対して、各審査委員から次のような質疑がなされた。

1. 表在癌が頭頸部で発見される背景について
2. 内視鏡的な肉眼分類と腫瘍深達度の関係について
3. 切除標本の固定の工夫、切り出し方法による誤差について
4. 腫瘍の組織型、分化度との関係について
5. 病変の深達度の判定方法、脈管侵襲の評価について
6. 腫瘍周辺のリンパ球浸潤について
7. 術後の追加治療、予後との関係について
8. 下咽頭癌の病態と経過観察期間の関連、とくに後発リンパ節転移の時期について
9. 予防的頸部郭清と治療的頸部郭清の適応について
10. 食道癌との併発症例におけるリンパ節転移の原発病変の同定について
11. 予測因子の多変量解析による検討と今後の多施設共同研究について

これらの質問に対して申請者は、自身の今までの研究から得られた知見と文献的なエビデンスをもとにわかりやすく的確に回答した。さらに本研究の限界と今後の研究の必要性を十分に理解し、本研究の展開を述べた。とくに今後増加すると推定される咽喉頭表在癌の浸潤転移機序の解明やその臨床応用への端緒として有用であることに言及し、大きな期待が寄せられた。

以上の結果、本論文は学位論文として十分な内容を有するものと審査委員全員の一致で判定された。したがって、申請者 戎本 浩史 は東海大学博士（医学）の学位を授与されるに値すると判断した。

論 文 審 査 委 員

主査	医学博士	徳田 裕	医学部教授	（医学研究科先端医科学専攻）
委員	医学博士	佐藤 慎吉	医学部教授	（医学研究科先端医科学専攻）
委員	医学博士	小澤 壯治	医学部教授	（医学研究科先端医科学専攻）
委員	博士(歯学)	太田 嘉英	医学部教授	（医学研究科先端医科学専攻）
委員	医学博士	大上 研二	医学部教授	（医学研究科先端医科学専攻）